平成20年6月15日発行　第39巻 第6号　毎月1回15日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊 地域保健

6
2008

●特集

CKD（慢性腎臓病）について知る

●FACE2008

神戸大学大学院保健学研究科地域保健学領域教授
松田宣子さん

FACE
2008

神戸大学大学院
保健学研究科
地域保健学領域教授

松田宣子さん

母子保健は終生のテーマ

一歩ずつエビデンスを積み重ねていく

photographs：Sei Kamiyasu

異常な事件が連日のように報道されます。児童虐待も後を絶ちません。社会から「健全さ」が失われつつある今日、保健師は母と子の「健全さ」を保つ役割を担っているのも確かです。「大切なのは子育て、思春期、母親になる前の教育」と語る神戸大学大学院保健学研究科の松田宣子教授に母子保健と保健師の専門性についてお話を伺いました。

子育てが困難な時代だからこそ母子保健を

―母子保健を中心に研究されているようですが？

松田　大学卒業以来、こども病院で小児看護に携わり、中学・高校一貫校の養護教諭の職に就いたりしてきましたので、私にとって母子保健は縁の深いテーマです。地域では高齢者のことがまず問題になりますが、子育てがたいへんな時代だからこそ、それを支援するのは身近な保健師だという思いがあります。

今まで厚生労働科学研究などで継続的に取り組んできたのは、母親の育児ストレスの問題です。その実態や原因、それに対してどのような支援が求められるかなどについて取り組んでまいりました。特に育児サークルの機能に注目してきました。育児サークルに参加しているお母さんは参加していないお母さんと比べて、育児不安や困難感が軽減するという結果が出ています。

また、児童虐待については、虐待発見のアセスメントツールを作成し、保健師さんに使っていただきました。虐待の程度、母親側のリスク、子ども側のリスク、家族機能、ソーシャルサポート体制などをアセスメントして、それらを統合して支援につなげるというものです。保健師さんたちからは、「今まで勘や経験に頼っていたことを客観的に見られるようになった」「いろいろな側面が見えて見落としがなくなった」などの意見をいただきました。詳細については、これから詰めていく段階ですが、虐待支援を見直すよい機会になったのではないかと思います。

虐待がすでに起こってからの対応は、臨床心理士など別に専門家がいますので、保健師は予防や虐待を悪化させないよう継続的に支援することが期待されると思っています。

難病の子の在宅支援

松田　それから、難病などで入院している子どもを在宅療養へと移行していくときに、保健師のケアコーディネー

◎ 特集 ◎

CKD（慢性腎臓病）について知る

腎機能の低下は人工透析に至るリスクを高め、心血管病変の進行を早めるが、生活習慣の改善や薬物療法により、進行予防が可能になってきた。近年、病因・病態の異なるさまざまな腎疾患をCKD（慢性腎臓病）という広い概念でとらえなおし、公衆衛生的な対策を立てようとする動きが各国で広がっている。わが国では成人人口の約6%がCKDに罹患していると推計されているが、医療機関や自治体において、その重要性が必ずしも十分に理解されていない。

今月の特集では、CKDについてさまざま角度から解説するとともに、保健師としてCKDにどう向き合うべきかをまとめた。

p8

CKDとは何か

浜松医科大学第一内科教授
菱田明

p16

わが国におけるCKD対策

名古屋大学大学院医学系研究科病態内科学講座
腎臓内科学特任助教
安田宜成（写真）

名古屋大学医学部附属病院長 腎臓内科・教授
松尾清一

p26

CKDと虚血性心疾患

九州大学大学院包括的腎不全治療学
客員准教授
鶴屋和彦

p34

CKDとメタボリックシンドローム

公立南丹病院腎臓内科 腎センター医長
草場哲郎（写真）

聖マリアンナ医科大学腎臓・高血圧内科教授
木村健二郎

p43

CKDと食事療法

東京医科大学腎臓内科教授
中尾俊之（写真）

東京家政学院短期大学
生活科学科准教授
金澤良枝

p52

保健師はCKDとどう向き合うか

上川町保健福祉センター・保健師
松川洋子

CKD

特集

CKD（慢性腎臓病）について知る

概論

CKDとは何か

菱田　明

浜松医科大学
第一内科教授

はじめに

慢性腎臓病（CKD）対策の重要性が広く認識されるようになってきました。CKDという疾患概念が提唱されたのが2002年であり、日本腎臓学会総会で通り取り上げ腎臓専門医の中での取り組みが始まったのが05年6月前後であることを考えますと、その普及の速さ、専門医の枠を超えた広がりの大きさは、当初の予想を大きく上回るものです。こうした広がりの速さは、「情報社会を反映した現象」とも考えられますが、基本的にはCKDがもつ問題の大きさを反映していると考えるのが適当と思います。本稿では「CKDがなぜ、今問題とされるのか」「今、CKD対策に何が求められているのか」を考えながら、「CKDとは何か」についてまとめます。

CKDがなぜ、今問題とされるのか

CKDは「尿蛋白陽性など腎臓に障害がある所見がある、もしくは、糸球体濾過量（GFR）が60ml/min/1.73m²未満の状態、が3カ月以上続く状態」と定義されます。

今、CKD患者に対する対策が強く求められています。尿蛋白が陽性や腎機能低下が続く状態は、「慢性の腎臓病」として以前からもあり、よく知られていたにもかかわらず、改めて「CKD」として注目するようになってきた理由には、「透析患者数減少への要請の高まり」「心血管イベント抑制のためのCKD対策の必要性」と「CKD治療の進歩」という三つの大きな時代の流れが背景にあります（表1）。

表1　CKDが今問題となる理由

1. 透析患者の増加の抑制が強く求められている中、CKD（尿蛋白の存在、もしくは糸球体濾過量の減少）が末期腎不全の強い危険因子であることが明かとなった。
2. 心血管系疾患の減少が強く求められる中、CKD(尿蛋白の存在、もしくは糸球体濾過量の減少)が心血管系疾患の強い危険因子であることが明らかとなった。
3. CKDが治療し得る時代になった。
4. CKDの数が、成人の13％近くに上る多数である一方、生活習慣の是正が発症・進行に重要であることが明らかになり、国民への啓発活動の重要性が明らかとなった。

1　透析患者数減少への要請の高まり

末期腎不全に至り透析療法が必要となる患者数は毎年増え続け、現在26万人を超え、日本人の500人に1人が透析を受けているという状態となっています（図1）。透析療法の開発・普及は腎不全で死亡する人たちの生命を救うという画期的なものでありましたが、20年、30年と透析を続ける人たちが多数になるにつれ、透析医療の問題点（定期的に頻回に通院が必要、合併症が多い、生命予後が短い）が改めて問題とされ、患者さんのQOL向上のために末期腎不全への進行抑制が強く求められるようになってきました。

また、透析患者数の増加は医療費の面からも、緊急の対策が求められるようになっています。そして、尿蛋白陽性や腎機能低下が続く状態（CKDと診断されます）の患者は透析に入る確率が高いことが知られていることから、こうした患者への取り組みを強めることにより透析患者を減らすことが求め

ひよこ保健師 season 2

杉本望（すぎもとのぞみ）さん

【高知県宿毛市保健介護課】

映画「孤島の太陽」に魅せられて

中学生のときに見たあの映画が将来を決めた

文・写真　西内義雄（フリーライター）

沖の島へのフェリー乗り場にて

1995年ころ――。高知県宿毛（すくも）市で開催された健康福祉まつり会場に、中学生の女の子が母親に連れられてやってきた。そしてまつりの目玉として上映されていた映画を見た。女の子はストーリーにどんどんのめり込んでいき、上映が終わり外に出たときに思った。

沖の島の集落のひとつ、母島地区の碑

「保健婦っていい仕事だな……」

上映されていたのは『孤島の太陽』という映画だ。地元宿毛市の離れ小島、沖の島を舞台に風土病のフィラリアと闘い、ひどく高かった乳幼児の死亡率を献身的な活動でゼロにした実在の駐在保健婦、荒木初子さんをモデルにしたものだ。

映画は68年の製作。樫山文枝を主演に、勝呂誉、芦川いづみ、宇野重吉、前田吟らそうそうたる俳優陣が個性豊かな役を演じている。美しい沖の島の景色、島ならではの習慣、駐在保健婦という制度、島民と保健婦とのやり取りなど、今でも十分に通用する名作である。

女の子はなぜそれを見ることになったのかはよく覚えていない。でも、前述のように保健婦の仕事についてすてきだなと感動し、今、どんな人たちが活動しているのか知りたいと思った。するとどうだろう、上映会場の目の前で市の保健介護課（当時保健環境課）のメンバーが健康チェックをしているではないか。

「あ、こういう人たちが保健婦さんなんだ……」

まるで絵に描いたような出会いだった。

あれから10年以上の月日が流れ、保健婦という呼び名は保健師となった。女の子も立派な大人に成長し、地元宿毛市役所に就職することになった。それはなんと、子どものころに憧れをもった保健師としてだったのだ。

ちょっと話がうますぎるだろうか？でも、本当のことなのだ。その女の子こそが、今回の主人公、宿毛市保健介護課の杉本望さんだ。おまけに孤島の太陽と同じ、沖の島を担当しているというではないか。どんなひよこさんな